《書　　評》

John D. Grainger, *Great Power Diplomacy in the Hellenistic World*

Routledge, 2017, Pp. viii+264

藏　戸　亮　太

アレクサンドロス大王のペルシア征服とローマによる長期的な征服活動という 2 つの重要な出来事によって枠取られるヘレニズム時代の歴史において、征服と帝国は主要なテーマとされている[1)]。そのような状況の中で、本書は『外交』に焦点を当てることでヘレニズム時代の諸勢力の有り様を解き明かそうと試みるものである。

著者の John D Grainger は古代ギリシア史及び軍事史についての著作を発表している歴史家である。セレウコス朝を扱ったものをはじめとして、アイトリア連邦やローマまでの軍事史を幅広く扱っており[2)]、本書でもその幅広い関心と知識が発揮されている。その一方で、本書は軍事とは別の部分に焦点を当てたものとなっている。

本書は、外交の観点からヘレニズム時代の国家間の関係について詳述する。著者は、外交はヘレニズム史において看過されてきた点であると述べ、それを踏まえて当時の国家間関係における慣行を分析したうえで、それらがローマによって変質していく過程を提示するのである。

本書については、既に Bryn Mawr Classical Review に Daniel Tober による書評がある。同書評では、本書は多数の事例の蓄積による枠組みの提示やヘレニズム諸王とローマの対比が評価され、ヘレニズム時代を学ぶ者にとって新たな見方を見出せる作品であると述べている。その一方で、史料上推測によるところが多いという点に留意が必要であることや、著者の『外交』の語の曖昧さについて指摘しており、また必要な前提的知識が多くヘレニズム史の初心者にとっては理解し難いものとなっていると評している。内容とは別に、誤植の多さに起因する誤解の可能性も指摘されている[3)]。

この書評では、本書の内容を紹介した上で、評者なりの観点から論評を試みたい。本書の構成は以下のとおりである。4 部からなり、それぞれが 3 から 4 の章より成っている。

Introduction: Aims and plans

第一部：Techniques and practices

1. The origins of Hellenistic diplomacy
2. Royal marriages
3. Cities, summits, states, envoys
第二部：Diplomacy in action – the East
4. The diplomacy of the earlier Syrian Wars（274 – 241）
5. Aegean diplomacy: Ptolemy I to Aratos of Sikyon
6. The diplomacy of Antiochos III – I: the Greek world
第三部：Diplomacy in the West
7. Ionian Sea diplomacy
8. The diplomacy of Rome and Carthage – I
9. The diplomacy of Rome and Carthage – II
第四部：The collision of East and West
10. The diplomacy of Antiochos III – II: the Roman crisis
11. The diplomacy of peacemaking（222 – 188）
12. Rome and Greece（188 – c.120）
13. The later Syrian Wars（195 – c.140）
Conclusion

「導入」において、著者はヘレニズム時代における諸王国、連邦、都市の有り様について述べ、その状況から新たな外交慣行が発展したことを指摘する。この外交関係においては、都市や連邦の従来の慣行も機能し続けた一方で、諸王国の関係は創始者の同僚関係に起因する相互信頼に基づくものであったことを著者は特筆している。このシステムは前3世紀から前2世紀を通してギリシア世界で機能したが、それと同時に、西ではまた新たな外交システムが発展していた。そして、ローマのギリシア世界への進出とともに外交慣行も変化することになったと著者は述べる。それを踏まえて、本書は、まず東地中海地域におけるシステムの起源とその発展を検証し、それからローマ帝国の形成へと至る地中海西部のシステムを考察するとされている。これらを考察するにあたって、我々は当時『外交』に相当する語が存在しないという問題に直面するが、個別の事例を考察していくことで外交に相当するものを解き明かすことができると著者はいうのである。

以降の章は、ヘレニズム時代の外交要素を考察する第一部と、ヘレニズム初期から史料の不足する前150年までにおける実際の事件・出来事に沿って外交の有り方を検討していく第二部以降に分けることができる。議論の前提となり、また著者の見方が提示されるという性質上、本稿では第一部は章ごとに詳述することにする。

第一部「手法と慣行」では、著者はヘレニズム時代の外交的手法・慣行の有り方とそれらの基盤にあるものについて検討するとともに、著者の言う Great Power と共に当時の外交関

係を構成した諸都市や国家についても考察している。

第一章で著者はまずヘレニズム時代のギリシア世界は王たちの時代であったと指摘し、外交の考察においては王の存在とその力を最初に考慮する必要があると述べている。その上で著者は、ヘレニズムの王たちに特有の外交的性質として、和約は締結した王のどちらかが死亡するまで効力を持つものであり、その効力が王たちによって遵守されるものであったこと、そして宣誓の拘束性について、個別の事例を確認しながら指摘する。これらの拘束性は永続的効果を前提としない代わりに、王たちに合意の維持を十分に保証するものであった。

このような慣行は、マケドニアを含む地域の慣行を前提として、アレクサンドロス死後の後継者たち間の関係の中で構築・確立されたものであると著者は指摘する。この慣行においては、王国の創始者たちのかつての同僚関係もその要因になっていた。続いて著者はこれらと同時に、使節派遣の慣行がギリシア・マケドニア両地域それぞれの有り方でヘレニズム以前の時代から受け継がれていたことを指摘する。同盟は、一般に使節によって仔細が決定された後に締結・批准された。

王たちの間の同盟はときに王族の結婚を伴ったが、このような婚姻関係は同盟を維持する機能は持たなかった、と著者は指摘する。第二章ではこの問題について論じられている。まず著者はピリッポス２世からアレクサンドロス３世の時代を検討し、王家の婚姻は長期的同盟を目的としたものではなく、むしろ当座の政治的目的達成のためのものであったと指摘する。続いて著者は、このような婚姻の要素として王族には同等の者と結婚することが求められたという国内的事情を指摘する。この習慣は後継者争いでも利用され、ヘレニズムの諸王にも継承された。

これらを踏まえて著者は、ヘレニズム時代の王族の婚姻について検討を続ける。この時代においても、王家の婚姻は短期の政治的事情によるもので実際上の同盟を意味するものではなかったことを、セレウコス朝とアンティゴノス朝の関係から指摘する。その一方で、婚姻は政治的・軍事的交渉を伴う重要なものでもあったことも述べている。続いて著者はプトレマイオス朝における兄弟姉妹婚について論じる。この慣行は前述の王族同士の結婚という考えを下敷きとして、王家の女性を一族内に留めておくことが目的であったと著者は指摘する。この婚姻には、長女には王位請求の可能性があるという考えの下で、王家外の人間が王位を求める可能性を排除する役割があり、他方で他の娘たちは他の支配者たちとの外交の手段となりうるものであった。

これらのことから、著者はヘレニズム時代の王族の婚姻は短期的で婚姻同盟と呼べるものでは決してなかったと結論付け、それらはむしろ王族の特権性を示す目的のものであったという見方を提示している。第一章・第二章で検討された和約の維持・王家の婚姻の慣行については、著者は以降の章においてもしばしば言及しており、特に議論の重要な要素となっている。

第三章では、外交に関わる要素として王と都市の関係、「首脳」会談、王国の承認、使節

の働きについて検討する。前提として、諸都市は王国の存続にとって脅威となるようなものではなかったが、それでも特に古く独立性を求める都市は外交の必要がある存在だったと著者は述べる。これらへの対応の在り方は王朝によって異なったが、いずれにしても都市は自治を行いつつも外国との関係では宗主国の意向に従う必要があったことを指摘する。その中で、両者の関係は密接かつ王の制御下にあり、都市は自治の姿を与えられつつも現実には独立とは言えない状態にあったと著者は述べる。

次に「首脳会議」については、ヘレニズム時代には稀であり、アレクサンドロス大王死後には行われたものの、その多くは成果のないものであったと述べている。例外といえる場合においても、実際の交渉は事前に行われていたもので、「首脳会議」そのものが機能したのではないと著者は指摘している。更に著者は、新たに独立した王国が承認される過程について述べる。このような過程は一般に新しい王が支配力を継続的に示すものであり、独立は王が和約や王家の婚姻といった形で認められることで完遂された。最後に使節について、著者は使節の役割は主に紛争の解決であったが、その他に警告や宣戦布告も含まれていたと述べる。使節は時代を通して一般的な外交方法であり、また使節の構成員は特別な扱いを受け、不可侵とされた。

第二部・第三部では、以上の第一部の議論を踏まえて、地中海東西それぞれにおける外交の有り方について具体的に検討されている。

第二部の第四章は第一次から第三次のシリア戦争、第五章はエーゲ海地域での外交、第六章はアンティオコス３世の活動に充てられており、前述の外交的慣行が実際にどのように機能したが詳しく述べられている。これらの章で著者は、戦争が軍事的であると同時に、あるいはそれ以上に外交的なものであったと主張し、軍事的側面に注視するあまり当事者の実際の目的・意図を誤解する可能性を指摘している。それと同時に、著者は連邦や都市による王たちによるものとは異なる外交や非外交的手段についても述べている。これらはときに都市や連邦の王と比べて弱い地位に由来するものであったが、最終的には王朝の優位の下に帰結しており、外交は現実の力に基づいてこそ十分に機能したと著者は指摘する。

第三部は地中海の西部の外交について、シュラクサイ、ローマ、カルタゴを中心に詳述しているが、そこの中で著者は、重要な要素ではないものの都市間の外交における相互不信について言及し、これら都市間では条約は状況に応じていつでも履行されなくなる可能性があったことを指摘している。

第三部では更に外交と軍事の関係性の変化についても述べられている。第七章で述べられるシチリアでの紛争については、著者は戦争の間にも常に外交があったことを指摘し、外交が軍事以上に重要であったことを強調する。その一方で、第八章の第一次ポエニ戦争においては、その期間において戦争を続けることが優先され外交の機会は極端な事態を除いては戦争の初めと終わりに限られた、と著者は指摘し、第一次ポエニ戦争の間にローマの優先順位は軍事優先に変化したと述べる。

ローマが外交を用いる場合においても、軍事力はその背景として存在していた。第九章では、第二次ポエニ戦争において外交は平和を求める方向ではなく戦争を拡大する方向に機能し、その終盤には外交は優先されるものではなくなっていたと著者は述べる。その一方で支配においては、多くのギリシア都市は「ギリシアの自由」を語るローマの側につくことに抵抗が少なく、他方でローマに制圧された都市は反抗しがちであったことから、外交が軍事よりも有効であったことも指摘している。

以上の第二部・第三部で地中海東西地域の外交について確認した上で、第四部では両地域の外交が衝突し変化する様子が述べられる。著者は外交における東西の対比として、東部地域では外交における武力の誇示が最小限だったのに対して、ローマの外交は軍事力を主要な圧迫手段とするものであったと述べるが、その一方でローマは少なくとも前 188 年までは東部地域では外交慣行に概ね従っていたことも指摘する。この段階でローマは基本的には衝突の機会を避けようとしたが、マケドニアとの緊張が高まる時期になると外交の機会は実質的になくなり、またローマは東部地域でも外交を問題解決ではなく自身の力の伸長に用いるようになった。ここへきてローマの軍事・外交は統合され、そしてアシアの併合の段階に至ると、ローマにとって必要なのは少しの軍派遣と一方的な「外交」だけだった。これが著者が述べるローマの東方進出の流れである。

一方、セレウコス朝・プトレマイオス朝の外交においても、表面上従来の慣行が続く一方で裏では政治的優位を得るための陰謀が繰り返されるという変化が起こったと著者は指摘し、これはおそらくローマの手法が影響を与えた結果ではないかと述べている。他方でローマはこれらの国へは軍事力を行使しようとはせず、それ故に両国は基本的にローマの決定を無視することができ、ローマの「新たな外交」は十分に機能しなかった。前 150 年の段階では、ローマは両国に影響を与えつつも、直接に統制を行える状態ではなかった。

「結論」において、著者はヘレニズム世界とローマの外交慣行を対比した上で、ローマは帝国的征服に前者の慣行を利用したと述べる。これはヘレニズムのシステムに沿ったものではなかったが、ローマはその軍事力でギリシアを支配するに至った。ここに至り外交はその重要性を減じたが、一方でローマと残るヘレニズムの王国及びパルティアとの関係はおよそヘレニズムの様式に沿ったものであった。

本書は外交という視点で前 150 年までのヘレニズム時代の歴史を検討するものであり、内容の幅広さも手伝って多くの問題を提起し、また新たな視点を提供するものであるといえる。推測に基づくところが多いものの、多くの事例の検討により説得力を与えるものとなっている。また、いわゆるエレウシス会議についての言及（pp.231-232）に見られるように、史料に見られる解釈に対する慎重な検討姿勢も指摘できる。

ヘレニズムとローマの外交をそれぞれ紛争の解決・和平を求めるものと自勢力の優越を追及するものとして対比し、その上でローマの地中海東部地域への進出をヘレニズムの外交と

ローマの外交が接触し前者が後者によって変質する過程として示すのが本書の提示するところである。著者は、一見戦争が続くように見えるヘレニズム世界を外交が軍事よりも重要な役割を果たす空間として論じる。この外交の軍事に対する優位については、著者は繰り返し強調しており、ローマに関してもある時期までは指摘できると述べている。このような有り方においては、軍事的行為は目的のための手段の一部でありその遂行そのものが目的ではなかった。

本書では多数の、広範な事例に対する検討によって当時の外交が考察され、ヘレニズム時代前半の地中海東西地域の現象が、2つのシステムが一体化する流れとして一貫して示されている。この点で、「導入」で述べられている外交に基づいて地中海地域のシステムとその変化を示すという目的は十分達成されているといえよう。

その一方で、本書は外交の重要性を強調するあまり軍事が果たした役割が過度に小さく見えるように思われる。実際のところ著者は軍事の機能についても言及し軍事が重要な役割を担った例も挙げているが、外交の優位性が繰り返し協調されるために軍事の役割が過少にしか語られていないという印象をぬぐえない。また、Toberの書評でも述べられているが、著者の「外交」の概念は曖昧であり、ときに軍事が「外交」の一部となっている。しかし、そもそも当時「外交」という概念が存在しなかった以上、軍事だけを特別に切り離すことはできないのではないか。当時の歴史的出来事が一般に軍事中心で見られている現状に対する提言としての性質上やむを得ないのかもしれないが、この点についての言及が軍事を背景にした外交やローマによる進出の中での軍事と外交の統合（p.219）という程度に限られるのは、本書において両者の関係を考えることを難しくしていると思われる。とはいえ、この点は当時の「外交」を考える上で議論を広げる助けとなる要素かもしれない。

またヘレニズム世界とローマの外交の対比も、全般としての説得性はあるものの、かなり単純化して述べられているように思われる。特に後継者戦争の時期においては、アレクサンドロス大王の遠征において用いられ後継者たちによっても主張された「槍で勝ち取った領土」の概念[4]が実際上の認識では放棄されていたというのは考え難く、この点についての言及が見られないのは納得しがたい。確かにヘレニズム諸王の戦争における方向は反乱でない限り相手を完全に打ち倒す類のものではなかったようであるが、それでも軍事的達成は目的たりうるのではないか。

また、本書では総じてローマの悪辣さが繰り返し語られ、悪辣で攻撃的なローマの外交と、問題解決を求めるギリシア世界の外交という対比が表されている。そのために、ギリシア世界の変化が凡そローマの一方的な進出によって生じたものであるかのような印象が否めない。実際のところ、本書の中でも述べられているようにギリシア世界の中でも様々な力関係が働いており、和平・紛争解決を目的とする外交の存在を加味してもおよそ150年という長期の間に内的変化がなかったとは考え難い。この点でも単純化が生じていると指摘でき、更なる検討が必要であろう。

このような問題は指摘できるものの、本書は当時存在しなかった『外交』という概念を用いつつも十分な事例を基にして一貫性を持った議論がなされている。前述のように概念の曖昧さや実際上の不確かさは残るが、これは後代の概念の適用における困難を我々に改めて示しているようにも思われる。本書はまた内容の幅広さと詳細さ、必要な前提知識の多さ故に全体の把握において困難が伴いうるが、他方で一部地域・時期、また外交要素に関する議論に限っても新たな見方を引き出しうるものとなっており、これら地域の政治的変化以外の研究に関わる者にとっても価値ある議論であるといえるだろう。

ヘレニズム時代については様々な事象についてギリシア的・オリエント的といった側面も含めて議論がなされており、またローマ帝国の形成は古代史において大きな関心を集める領域である。そのような中で、本書のアプローチは看過されがちな要素に光を当て、幅広い領域においてより多角的な見方を提示することに大いに寄与するものと言えるのではないか。

註

1）Austin, M. '*The Hellenistic World from Alexander to the Roman Conquest*', Cambridge, 2006.

2）ヘレニズム時代に関する著作としては、*The Cities of Seleukid Syria*, Oxford, 1900 や *The Roman War of Antiochos the Great*, Brill, 2002 などが挙げられる。著者情報については https://www.bloomsbury.com/author/john-d-grainger（2018 年 9 月 9 日閲覧）及び https://www.encyclopedia.com/arts/educational-magazines/grainger-john-downie-1939（2018 年 9 月 9 日閲覧）を参照した。

3）http://bmcr.brynmawr.edu/2018/2018-06-05.html（2018 年 9 月 9 日閲覧）

4）森谷公俊「アレクサンドロス大王からヘレニズム諸王国へ」、『岩波講座　世界歴史 5　帝国と支配』、岩波書店、1998 年、115 ～ 140 ページ。